

料理を磨く男たち

— 男の料理倶楽部MCCを訪ねて —



家事への男女共同参画「事業」は家庭という私的領域内のことだけに、なかなか一様にいかない面があるようです。とりわけ、家族の生命の源である「食事の支度」は、単に空腹を満たすだけでなく、さまざまな人間の根源を支える大切な営みでもあるだけに、担う側の負担感はずななくありません。この「食事の支度」という究極の家事を家族はどのように捉えているのでしょうか。食卓につけば、美味しく栄養も愛情もたっぷり、その上血液もさらさらになる料理が毎回かさ

ず並ぶのが当然と思っている方は少ないでしょうが、黙っていても食事は並ぶものと思いついていない男性は多いのではないのでしょうか。

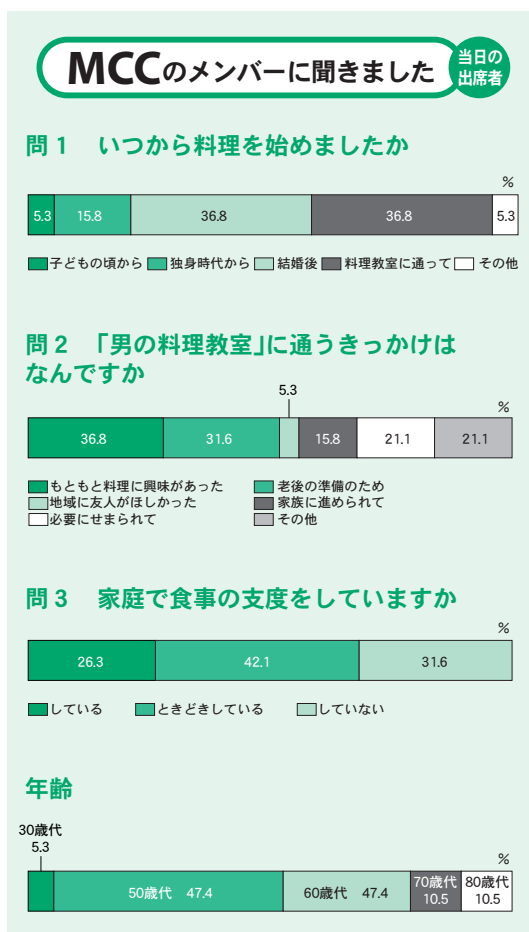
このことが、長い歴史の中で、生物学的な性差のうえに、更に精神構造の奥深くに抱え込まれた無意識の性差ではないのでしょうか。家事の得意な男性もいれば、外でバリバリ働くのが好き、という女性もいるかもしれません。

私たちはそのことに気づいて久しいのですが、なかなか意識改革ができないです。しかし、社会状況の変化は家庭内にも少しずつ変化をもたらしているのかもしれない。

* * * * *

公民館主催の「母の日に贈るお父さんの得意料理」という短期講座から発展して10年間も惣菜作りの腕を磨き続けている「男の料理倶楽部MCC」を訪ね、料理教室に通い始めたきっかけ、教室に通うことによって家事に対しての意識に変化があったか、家事を女性が全面的に担っていることに対してどう思うか、などを伺いました。

「単身赴任」「共働きなので子どもに食事を作るため」「かみさんの手料理を不



味いと言ってしまう、じゃあ、自分で作れと言われて」等、必要に迫られての方。「一人になった時、食事くらいは自分で作りたい」「単身赴任の時、家事全般ができて初めて男の自立と自覚した」「家事から女性を解放したいし、僕も解放されたい」等の自立志向の方。

きっかけはそれぞれでしたが、教室に通うことで家事や女性に対し考え方に変化はあったのでしょうか。

「料理は好きだったが食事づくりは大変と実感した」「エンドレスで家事をしていく妻への最大のサービスの自己表現」「僕は同等に家事をしているが妻は絶対認めないんだよ」「家事は全て完璧にできるが外で働いているので今は何もしない」「家事はかみさんの領分だからね」「いざという時はOKだ、僕に任せろ」「専業主婦なら家事全般をするのが当たり前」「家事は嫌いだけど共働きの奥さ

んに悪いから仕方なくやっている」と、意見は様々でしたが、家事の大変さを実感されたようです。皆さんの、妻への「ありがとう」の言葉が印象的でした。

* * * * *

今回訪ねた「男の料理教室」の男性は「自分ひとりのために食事は作らないが家族の喜ぶ顔を見るのが喜びで食事を作る」フェミニストでした。またプチ自立をめざしながらも、やはり専業主婦なら苦手でも家事は当然との勇ましい声も聞こえました。一方、てらいも気負いもなく自然体で、出来る所から家事を実践している男性もいるという空気も感じられました。

家庭の中の小さな実践が、社会制度の変化と結びついた時初めて風の向きは大きく変わるのではないのでしょうか。